アジアの健康

編集委員が見た国際研修

潜入レポート　p 2～3
Our Journey 2023　p 4～5
研修生に直撃インタビュー！　p 6
担当職員の仕事ぶり　p 7

ボランティア紹介　～声の飛行船～　p 8

AHI
アジア保健研修所会報

2024年冬号

編集委員カルテット

国際研修に潜入してみた！ <I>

2023年8月28日～9月24日
アジア諸国より研修生が来日し、
4年ぶりの対面国際研修が
開催されました。
今号では私たち編集委員が
研修の場に潜入し、
見たこと、聞いたこと、感じたことを
お伝えいたします。

今回のネタフリ役

編集委員 I
子どもが巣立ち、私も
羽根はえちゃってます

編集委員 A
愛犬と自然いっぱいな
日進が大好きです

編集委員 K
文楽・K-POP・アニメ
興味の赴くまま
三昧生活

編集委員 S
栃木出身の愛知2年目
大動物（牛など）が
大好きです

今年の夏はとびきり暑かった！そんななか、研修生たち、ハツラツとしていたよね。
国際研修を実際に見て、みなさんどんな事が印象的だった？

研修生たちのセッションに対する姿勢が変わっていったところ。
当初、主張するだけの研修生がともに考えていこうというスタンスになっていった。
又、研修見学の折、言葉の面や全体の流れの説明など笑顔でサポートしてくださった
前事務局長の林さんの内面からの美しさ、レジェンドぶり。素敵です。

ラクシリさん　優しいよねえ。他の研修生がボールペンを忘れて困っていたら、
1本しかないボールペンを貸してしまい、自分は蛍光ペン！
帰国後の活動計画作りでは苦戦していたけど、最終的に研修職員がどっぷり関わり、
プランも明確になり、本当によかった。

いろいろあったなあ・・・おでかけボランティアでリハンさんとキリスト教会の礼拝に行ったよ。
リハンさんもとにかく優しい。研修生たちってみんな子ども好きなんだよね。
また、研修生たちがAHIのボランティアさんに関心を持ってくれたこと、嬉しかったな。

私もラクシリさん印象的だった。あのはにかんだ笑顔、素敵よね。
あと、研修の中身そのものが興味津々だったなあ。緻密に構成された研修手法、
反面そのツールは手作りで温かい。そのバランスが絶妙なの。
あー研修職員の頭ん中、見てみたい～

潜入先その1　13日目
9/9 手話サークル MIMI 日進

聴覚障害当事者ショルナさんが大活躍！

研修生たちの挨拶が日本語で、歩み寄ってるなと感じた。
バングラデシュでは共通の手話がないので、ショルナさんの団体が共通の手話を本にまとめ、
政府もその本を承諾したとのこと。行動力が素晴らしい！

ここでは手話が公用語。私には異文化だったなあ。
ショルナさんがバングラデシュでの手話を紹介してくれたよ。
おやすみなさいはランプを消すしぐさ。
しぐさや文化から手話ってできるんだなと新鮮！ショルナさん堂々としていて恰好良かった。

潜入先その2　20日目
9/16 新城市若者議会

元議員や市の職員の方々と意見交換しました

行政の一端に若者議会があること自体が貴重。
研修生たちにとって若者グループが継続的に活動していくことを考える材料となったようです。
また、研修でちょっと煮詰まった彼らにはいい息抜きにもなったようです。
県民の森では童心に帰り、水遊び。そしてディナーはハラールレストラン！
新城市は山合いの町なんだけど、研修生曰く道が舗装されているので、田舎ではない！
とのこと。笑

そうそう。研修生たちは日本の道路にビックリ！
整備されてるねえ～と・・・

潜入先その3　28日目（最終日）
9/24 未来予想図

研修生と日本の若者が未来を描くワークショップ

1年後の自分を描くなんて夢があっていいよねえ。
ここでは進行役のボランティアさんも大活躍！

若者たちがアジアの研修生たちと関われる貴重な機会。
いい経験だし、お互いに刺激を受けられる。もっとこういう機会があるといいな。

最後に・・

じっくりどっぷり関われた国際研修
みなさん　受けてみたい？

そんなことないよ～
（研修職員T）

研修生とは背負っている課題の重さが違うので、その資格はないと感じている。

研修生たちの深いかかわりが印象的で、私には現場での活動はないけれど、参加してみたいなあ。

濃密な時間を過ごして研修生たちが現場に帰り、どう実践していくのかとても気になるなあ・・・
自分も参加してみたい！

結局、私は断片的に見ていただけ。
学びのしくみもぼんやりにしか
見えてきていない。
だからこそ、受けてみたいな。

次頁で私たち編集委員がみた国際研修の学びのしくみをご紹介します。

Our Journey 2023

<✍A, K>

目標も、進め方も自分たちで決めていく参加型研修。彼らの学びの旅をダイジェストでご紹介します。

お出かけプログラムは、ボランティアと休日を過ごし、日本の普段の生活を垣間見る体験。「未来予想図」は、日本の中高大生と交流しながら、よりよい未来を描くイベント。料理や送迎、会報の取材など、AHIとつながるボランティアとのかかわりも研修生には貴重な経験でした。

3. 政策提言

研修でいくつかの参加型分析手法を使ってみた研修生たち。それらを組み合わせて、若者が主体となった草の根レベルでの政策提言の可能性を見出しました。

マイルストーン 3

自分たちで設定しました！

2. 現状分析　批判的分析

「でも、なぜ？」「それは事実？意見？」いろいろな視点で状況を掘り下げることで、事実やさまざまな要因が見えてきます。さらに地域課題の利害関係者や協力の可能性についても分析していきます。

バングラデシュの手話についての発表

MIMI日進は聴こえる人と聴こえない人が共に手話を学び、問題を話し合う手話サークル。研修生は、障害のあるなしや年齢に関わらず誰もが平等に参加できる環境に感銘を受けていました。そんな環境を自分の活動 の中にも作りたいという意見も！

1. 目標と行動指針の設定

若者グループについて発表し、質問しあい、活動における課題を共有。それを踏まえて、研修の最終目標を設定しました。さらに最終目標に向けたマイルストーン（中間目標）を立てて達成度を確認していくこと、より良い学び合いのために守るべきルール、研修を運営するための役割分担などを決定。
研修が本格スタート！

マイルストーン 2

参加することで初めてわかる醍醐味

「でも、なぜ？」という参加型分析手法を知っているハシャムさんはあまり参加していない様子。わかっていると思っていることを、今一緒にいる人と「本当にそうなの？」と複眼的、批判的に考え直すチャンスを逃してしまっていいの？　と研修職員は問いかけました。

マイルストーン 1

「私たちの」研修

研修チームは計画・準備が夜中までかかることも。「大変すぎる」「研修生同士の交流の時間が持てない」という研修生たちの声に、研修職員が「変えればいいじゃない」。「えっ!?　変えていいの？」。最初に決めたやり方で上手くいかなければ臨機応変に変えていく。研修生たちが自分たちでその決断をすることで本当に「私たちの研修」になっていきました。

誰も取り残さないで進む

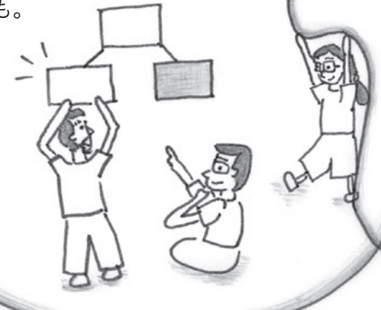
最終目標の理解度をロープ上の立ち位置で示し、全員が一つひとつの単語や表現について同じ理解に至るまで、説明や質問を重ねていきます。「みんな同じページの上にいるかどうかを確認しながら進もう！」が今年の研修の合言葉でした。

スタート

研修生全員で役割を分担。週ごとに交代します。

研修チーム

マイルストーンを念頭におきながら、自分たちの状況に合わせて、翌日の研修内容やスケジュールを考え、準備します。最初は「どうやって参加型のセッションをつくればいいの？」と戸惑いも。



生活チーム

料理、買い出し、掃除など生活に関わることを担当。料理が苦手な研修生は、他の仕事をがんばりました。共同生活での問題も話し合い、解決していきました。

それぞれの現場で、活動計画を実行！(AHIも伴走していくよ。)

再スタート　地域活動地域の落着

帰国後の活動計画

マイルストーン 4

「実はね…。」言えずにいた本音を伝え合いました。

4. 安心できる関係って？

「研修を通して、『安心できる関係』づくりのプロセスを学ぶ」という目標がありました。研修が進むにつれ、研修生同士の関係が深まっているものの、語れていないこともある様子。研修職員 は、本音を打ち明け合うワークショップをやってみないか、アマンさんに相談しました。「やってみたい！」
研修生同士が、言いづらいことも伝え合い、本当に安心できる関係について理解し、取り組む覚悟ができました。

何度も軌道修正

新城市とインドのカマソム村との共通点についての発表

新城市若者議会は若者が政策づくりにかかわる機会。地域活動に自発的に関わる若者グループメンバーのアヤさん。「制度化することで、ボランタリズムが損なわれてしまうのでは」という意見は、他の研修生をはっとさせました。

はじまり

研修生に直撃インタビュー!

無事研修を終えて、達成感にあふれ晴れやかな表情の研修生たちにお話をうかがいました。ここでは、スリランカ全国漁民連合の現場スタッフのタクシャさん、全国のコーディネーターのラクシリさんのインタビューをお届けします。　＜✍K＞

インタビュー中のショルナさん、タクシャさん

タクシャさん

ゼロから作る研修を15県の若者グループとやっていきたい

AHIの研修は、地域の課題とつながっていて、本当に価値のある、とても素晴らしい学びでした。今回、内容も時間割も全て自分たちで決めました。研修生の意見を聴き合って確認し、状況によって計画を変えていいと思うようになりました。

また、いろんな国、背景を持った人が集まり、たくさんの議論を積み重ねて、共通理解をつくる経験をしてきました。この過程を私自身が体験できたことは大きな財産です。

そしてショルナさんはとても近い特別な存在になりました。自由時間に一緒に散歩したり、セッションでも発言を促してくれたり、料理の時は手が荒れていた私を気遣ってくれました。

帰国したら、団体事務所に「研修のはじめからかかわりたい」と言いに行きたいです。研修をゼロから計画したり、状況に合わせて変えていくことで、若者たちが地域の問題に、自分たちで取り組む力（創造性、独立心…など）を身につけることができると思います。

まず15県の若者グループで、研修をゼロから担当し、実施後の成果や評価の分析もやること。どの程度達成できていて、それはなぜなのか、しっかり分析したいのです。そうすることで、若者の自分たちがNGOにずっと頼るのではなく、応用し、活動を持続的に続けていける力になっていくと思います。

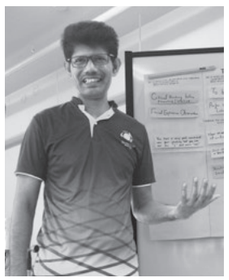
ラクシリさん

急がずに歩く。「自分で使うことができる大切なこと」をつかみとるために

母と二人暮らしで食事、掃除を毎日やっているので、研修中の生活にかかわる分担は大変とは思いませんでした。細かいゴミ分別ルールは少し戸惑いましたが、ゴミ分別も皿の汚れを拭いてから洗うのもいいことだと思いました。

途中体調を崩して1週間お休みしましたが、他の研修生が休んだ分の内容について教えてくれました。一方、他の研修生からコミュニケーションについての助言をもらっても思うようにできない自分がいて、「I'm Laksiri, but I still don't know who I am.（自分はラクシリだけど、自分が何者なのかまだわからない）」と言ったこともありました。

帰国後の活動計画発表ではみんなから矢継ぎ早にいろんな質問が出ました。みんなが私の計画を理解しようとしてくれていることが伝わってきました。質問や意見をもらうことでわからないことやあいまいな点が明確になりました。再度練り直した活動計画を皆が認めてくれてうれしかったです。



速く走ろうとすると、いろんなものが抜けてしまいます。歩くと周りにある大切なものをしっかり見てつかむことができます。急がずに周りのものを見据えながら深く議論したことで、ちゃんと「自分で使っていくことができる発見」をつかみとることができました。

担当職員の仕事ぶり

2023年　国際研修を担当された高田さん、大熊さんにお話しをうかがいました。担当職員２名体制、３年におよぶオンライン研修を経ての対面研修と例年とはかなり状況設定が違ったようです。　＜✍I＞

高田弥生さん　研修担当　10回目

参加型研修ってコラボワーク！
答えは研修生が教えてくれる。

**アナログに徹した研修でした。プロジェクター使ったのって２回くらいかなあ・・・
自分の言葉が全て壁に貼りだされ、そのまま”ソコ”にあるので、何度も立ち返ることができ、
並べることにより更に思考が膨らむ。
アナログってとてもいいプロセスを踏む。
新たな発見でした。**

大熊優子さん　研修担当　3回目

「研修は生き物だ」を実感

**手探りでのスタートでした。
研修を進めるにつけ、掴んでいった事があります。
議事の進行は私たちが動かすものではなく、研修生とキチンと向き合っていれば、自然と動いていき、方向は定まっていく。私たちはそれを信じて横からサポートする。
その見守る姿勢が大切だと思いました。**

編集委員Iのつぶやき・・

いままであくまでもイメージで描いていただけの国際研修。
実際に目にしましたが、なにせこのお二人が恰好いいのです！
研修の目標設定はもちろんそこに到達するためのセッション内容までのすべてを研修生に委ねるのですが、行ったり来たり立ち返る彼らにブレない軸を示しつつ寄り添ったり・・・。
（とても一言では言い尽くせません・・・）

全体を見渡しつつ、個々を観察する洞察力。議論をコーディネートする力
そんな高田さんに筆者は圧倒されました！
ご本人に確認したところ、その力は10年かかってつかんできた「感覚」とのこと・・・
あくまで間接的に研修生の力を引き出します。

さりげない助言で研修生を促す月のような大熊さん。
これって簡単なようで、実はとても難しい。
全てを深く理解していないとできないことに思います。

そんなお二人を笑顔で温かく見守る事務局長清水さん。
研修職員はもとより、みんなの心の支えだそうです。

エプロン姿でPCもってパタパタ走る林さん

知力、体力、精神力、気力、集中力etc...
色んな力を使い切った研修後の抜け殻高田さん

また、要所要所で存在感の光る前事務局長林さんの深い知見。
意外に天然な面もあり、そこがまたチャーミングですね☆

インタビューの中での高田さんの発言。
「研修生がやってみたいのならばそれを大切にする。彼らが思ったようにいかなくてもそこから学びが得られるから。私が思う確実な線を取る必要は“ナイ”」
「まずはやってみたら」は清水さんの口癖でもあります。

AHIの精神はこうして受け継がれていきます。

ボランティア紹介

今回は、会報音訳を担当してくださっているボランティアグループ“声の飛行船”にインタビューしました。　<✍A>

声の飛行船

日進で活動する声の飛行船は、目の不自由な方や文字を読むことが困難な方のために、市の刊行物や新聞記事などを音声にし、CDなどに入れて届けています。要望があれば対面朗読をすることもあります。

メンバーは、2グループに分かれ情報を共有する例会を開き、毎日、個々にメンバーの誰かが音訳に関わる作業をしています。また、「東海音訳学習会」に、2ヶ月に一度参加し、日々変わる情勢にも対応できるようにと勉強しています。

秋にはリスナー交流会を開催。普段は音を届けるという一方通行の活動のため、リスナーさんと実際に会い、双方向のコミュニケーションができる良い機会になっています。

ある時、私の声を聞いたリスナーさんから「〇〇を読んでいる人？」と聞かれた時は、とても嬉しく、会ったことがないのにリスナーさんの音を聞く感覚が研ぎ澄まされていることに、目が開かれる思いがしました。

また、「新聞のお料理欄を読んでください。」と、リスナーさんに頼まれた時はびっくりしました。目の不自由な方は、あれやこれやできないだろうと思い込んでいたのが、とんでもない勘違いだったなど、理解が深まりました。

AHIの会報については、写真が多く楽しみながら音訳をしています。写真の説明は難しく、想像を入れてはいけないため、事実のみを音訳。例えば、数えられない時は「大勢の人」などの解説をいれています。また、民族衣装があると「こんな衣装なんだ」「これはなんていうのだろう？」と調べたりして楽しいです。

月曜グループのみなさん

金曜グループのみなさん

みなさんが活発に活動しながらも、向上心をもって勉強をされている姿が印象的でした。

読者アンケート

2024年冬号をお読みいただき、ありがとうございます。
QRコードからアンケートにご回答ください。今後の改善に活かしていきます。
会報は編集委員ボランティアと事務局が一緒に企画・編集をしています。皆さまもフィードバックで会報づくりにご参加いただければ幸いです。
また編集委員ボランティアも募集中です！
ぜひアンケートからご応募ください。
※2024年3月31日締め切りです。

編集後記

「編集委員の視点で！」度々出てきた言葉。昨年まで、AHIの取組内容や研修生の様子、こぼれ話をお聞きして、それは面白い！気になる！と深堀してきた会報とどう違う？職員が精魂込めて準備し、研修生とつくりあげた4週間。研修生が生き生きと学んだ雰囲気が伝わっている？長年の会員さんや初めて出会う方まで読者の知りたいことに応えてる？読者の気になることが気になる私です。（K）

TEL：0561-73-1950　FAX：0561-73-1990　✉：info@ahi-japan.jp　website：https://www.ahi-japan.jp　Facebook：https://www.facebook.com/AHI.JP/

発行所：公益財団法人 アジア保健研修所（ＡＨＩ）〒470-0111愛知県日進市米野木町南山987-30　発行編集責任者：斎藤尚文
編集者（会報編集委員）：赤尾彰子　井田みのり　岸田美穂　関口明希（担当職員）　イラスト：赤尾彰子
表紙コラージュ：井田みのり　関口明希　その場にいた職員（みんなでワイワイ作りました笑）